

日本山岳会 越後支部報

第 8 号

平成25年9月1日
発行 日本山岳会越後支部
発行者 橋本 正巳
新潟県上越市とよば9番地
TEL・FAX 025-524-7215
広報委員長 本間 一人



私の一枚

毎年7月25日行われる高頭祭の一コマ。元越後支部長である平田大六氏の祝詞で今年も執り行われ、古の高頭氏を偲んだのだが、多くの仲間も偲ぶこととなり、残念の極みである。

撮影 本間一人

支部長就任にあたり



日本山岳会越後支部長 橋本 正巳

この度、支部長を仰せつかりました会員番号七七五八の橋本と申します。
心境はと問われれば正に晴天の霹靂、兵役を終えた老兵が何かの手違いで再度召集令状を受け取り、右往左往しながら戦場に駆り出された、そんな心境で有ります。

齢を思えば一年先はおろか、明日をも知れぬ身と言つても良いでしょう。

中国の詩人、杜甫の詩に「九日藍田崔氏莊」と言う詩があります。その一節に「明年此会誰が健為るを知らんや」という部分があります。この詩は中国の九月九日の重陽節に中国藍田県の崔氏の別荘に招かれた際に詠ったものと言われております。心境は正にこの詩の通りでございます。

諸般の事情を鑑み、固く辞退して参りましたが山崎前支部長はじめ諸先輩の説得に抗しきれず落城した次第です。浅学非才の身、何かの役になつとも思えません、一期限定で最後のご奉公に専念させて頂く所存でございます。幸い本間、遠藤両副支部長はじめ、桐生事務局長、そして力強い重厚な各委員長を選任して頂き、安堵いたしておるところでございます。

越後支部として進めたい目標は幾つかありますが、絵に描いた餅になつてはなりません。大風呂敷を広げず地道に出来ることから進めたいと思っております。一つは委員長会議や支部総会等折に触れお願い致しております、新入会員の増加を図ることであります。越後支部も若い力を必要としております。どうか新入会員勧誘に一層のご協力をお願い申し上げます。

れには魅力ある企画が必要でしょう。会員各位のご提案も併せてお願い致します。六月十五日東京に於いて、平成二十五年度第一回支部長会議並びに通常総会が開かれました。支部長会議では今期を以て退任される尾上会長から次のような退任の挨拶がありました。退任にあたり振り返ってみると、日本山岳会会員の人材の豊富さを痛感した。また大きな方針であった「復興／復興」のレールを敷く事が出来た。また今後のテーマとして、次の四点についてその方向性を示されました。各支部に於いては①各支部に於いてルームを持つ努力をしてほしい②支部独自の山行を増やしてほしい。③対外的事業を展開して欲しい④支部内に同好会を作つて欲しい。(カメラ同好会、植物同好会、ETC)等要望されました。また議題として「日本三百名山」「山の日制定について」「群馬支部の設立について」「YOUTH CLUBについて」「子どもゆめ基金について」等の経過報告がありました。特に支部独自の山行を増やすことや、支部内に同好会を立ち上げることに於いては共感を覚えます。以上簡単ですが、ご報告申し上げます。

最後に越後支部会員各位皆様方のご指導を頂きながら進めて参りたいと存じます。宜しくお願ひ申し上げます。就任の御挨拶とさせていただきます。

訃報 室賀輝男名誉会長永眠

永年のご指導に感謝

支部長を退任するにあたり

山崎 幸和

平成二十四年四月をもって本会の組織が公益社団法人となり、それに伴い当支部も『公益社団法人 日本山岳会越後支部規約』を制定。その役員任期の条項に「支部長は二期までとする」と、初めて支部長の任期を付け加え明文化いたしました。二期四年という支部長の任期について賛否両論でしたが、昨今の目まぐるしい岳界の変貌に対処し、公益法人として活動展開するにはトップの活力が不可欠、と身をもって体験したからであります。長からず短からずの期間であると思います。

この四年間、会員各位の支援と役員協力をお願いいただき越後支部を及ばずながら、少しは組織活性化のスタートラインに付く体制ができたのではないかと、思っております。しかし、弱者には如何ともし難くまだまだ及ばぬところ多々あって、期待に添えなかった点は深くお詫び申し上げます。

その中で一番の気掛かりは、六月第一日曜と決定した『山の日』の新潟県の行事が未確定のまま、とうとう公表できなかつた事です。仕掛り案件を後任者に引き継ぐ無礼は避けたいと努めました、時間切れの為持越しです。新潟県の「山の日」の行事には、海のウエスタン祭が最もふさわしいと確信し、昨秋から主催責任者と何回も

交渉を続けて参りましたが、相手側の事情度外視の無理な要請。趣旨のご理解はいただいたものの、二十六年度からの実施には他行事との日程調整、行政、多くの支援団体への説得など課題が山積しており、一方的な申し出で大変迷惑をお掛けしている状態です。根気強く交渉継続に努めたいと思っておりますので、各位のご理解ご協力お願い申し上げます。

新たに就任された橋本正巳・第八代支部長は、新潟県山岳協会会長も歴任され、永年の豊富な山歴と会運営にも抜群の手腕を秘めておられ、しかも県内はもとより全国的にも旧知の岳人が多数おられる県内トップクラスの方。越後支部にとって正に待ち望んでいた支部長を迎えることができましたことに、各位と共に喜び合いたいと思えます。

代わりに、昭和四十四年春から今春までの四十四年間の永きにわたり支部役員をさせていただき感謝に堪えません。退任にあたり、改めて厚く御礼申し上げます。

室賀輝男日本山岳会

名誉会員のご逝去を悼み

日本山岳会越後支部長 橋本 正巳

二〇一三年七月二十七日、空には厚い雲が立ちこめ、梅雨空特有のどんよりとした空模様朝でした。

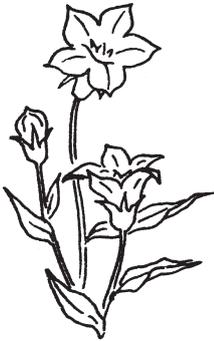
七月二十五日の高頭祭、そして翌日の二十六日は日山協会会長、神崎忠男氏と八木原冨明副会長を伴い、藤井先輩宅へご案内した後、長岡の高頭仁平衛翁の墓前にもご案内し、ホツとしていた矢先、土田先輩から慌ただしく一本の電話が入りました。それは室賀輝男日本山岳会名誉会員御逝去の知らせでした。正に晴天の霹靂、痛恨の極みの日を迎えた次第です。

新潟県内は勿論の事、国内山岳界の重鎮として、比類なき行動は、誰もが知るころであります。八十六年間の軌跡の一つ一つが、貴重な歴史であり、八十六年の一時期たりとも無駄にせず、一気に駆け抜けた人生で有ったと思われれます。県山協会会長、越後支部長、保護司等の重責を全うされる中、数々の海外遠征を果たされ、一方では

パプアニューギニアから、墜落された山本五十六元帥の搭乗機の帰還運動などの数々の功績は、枚挙に暇がありません。想い起こせば二〇〇九年の春、丁度上越は、春爛漫のお花見のシーズンでした。室賀先輩から電話があり、今日お花見に行くが都合は

如何かとの電話でした。拙宅を新築してから丁度二年目、拙宅をお尋ね頂いた山岳関係最初のVIPで有ったと思います。その時は既に車椅子に乗られ、奥様とご一緒のご来高でした。私が県山協にお世話になりました頃の右も左も分からない中、当時の上越山岳会の先輩に連れられて室賀先輩宅を何度か尋ねさせて頂きました。記憶は定かではありませんが、呉服等を扱うお店であった印象が有ります。大光相互銀行を取り仕切って居られただけに、毅然とした御振舞の中にも、優しい温かなお人柄で居られました。私の兄も同業の高田信用金庫の理事長をしていたこともあり、そんなことも親密感を覚えた一因かもしれません。私が県山協会会長や、室賀先輩の後任としての尾瀬保護財団の評議員、そしてこの日の日本山岳会越後支部長を拝命する際も、室賀先輩はじめ藤井先輩、平田先輩のご指導があったからこそその結果であります。紙面に限りがあり多くを述べられない事かと思いますが、今此処に、私にとって人生の師であり、山の師である室賀先輩を失い、唯、天を仰ぎ諸行無常を思うのみであります。

合 掌



第五代支部長

室賀輝男さんを偲ぶ

元支部長 平田 大六

日本山岳会越後支部、室賀輝男第五代支部長のご逝去をお悔やみます。

闘病生活の後、七月二十七日、ご家族に囲まれ享年八十六歳の命を静かに閉じられたと承りました。

つづく二十九日の通夜には、橋本正巳支部長、県山岳協会の阿部信一会長をはじめ多くの岳人で会場があふれました。

森民夫長岡市長、馬場潤一郎県体育協会長のお姿もあり、広い活動ご友誼が窺われました。

室賀さんは、一九二八年に出生され、越後支部へ入会されたのは二十三歳、一九五一年（No.3925）です。一九九九年に支部長代行を半年ほどされました。

本部の永年会員、支部の名誉会員で後輩の指導にあたられていました。また、県山岳協会の会長を一九七五年から二十年間勤められ新山協の顔でした。室賀さんは登山をその行為だけでなく、文化の域まで止揚させるといふ、大きな夢と情熱、強いリーダーシップをお持ちでした。

かつて、土樽の高波五策さんを隊長にし、谷川岳の私設巡回隊を発足させたのも、その具現です、山本五十六の搭乗航空機部品を南の島から長岡へ回収されたリーダーも

室賀さんです、一九九三年第十四回北信越国体で使ったクライミングボードを会場の新発田から当時、小林兼一郎副会長のご自宅の藤塚浜へ移設し県岳人に広く開放されたのも室賀さんです、私もご指導いただきました。一九七九年開放直後の中国へ二週間連れていかれました。一九八八年中国大興安嶺踏査先遣隊長を室賀さんに命じられ

貴重な体験をさせていただきました。「大六は人畜無害だから」と新山協の婦人部長を一九七七年以来八年間、室賀さんにおおせつかりました。「越後山岳十一号（二〇〇七）」に室賀さんの論文があります、それは「越後支部草創期を支えた山岳会の人々」というテーマで十九団体一一〇名の方々の詳しい解説が数十頁にわたるものです。学者でもあったのです。

永い間ご指導ありがとうございました。……

室賀さんの死を悼む

日本山岳会越後支部副支部長 本間 宏之

もう二度と、あの「まあまあ一杯飲もうさ……」と言う懐かしいお声を聞くことはできないのでしょうか。

第五十五回高頭祭で松田名誉会員一行が高頭家墓参の件でご相談、ご指導をお受けしました。その後は行事や会議の報告のみとなりました。室賀さんの体調をみるとか

えってご迷惑ではないかと思うようになり、徐々に足が遠のきました。お許しください。

そして、今年の三月に長岡ハイキングクラブ代表を辞任されましたので、会則を「本会に若干名の名誉代表、顧問をおくことができる。」の条文を追加改正し、名誉代表に推挙されました。これからは、もっとう指導をお受けしたかったのですが、残念でありません。

室賀さんの多大な功績は山岳界のみならず他機関でも、誰もが認めているところであり、それは、室賀さんが培った情熱、先を見た確かな眼力、決断の速さ、チャレンジャー精神と厳しさがなす遂げたのではないのでしょうか。

ときどき大きな声で叱られた事もありました。しかし、不思議と勇氣と自信が湧き出る気持ちになりました。深い思いやりの叱り方がそうさせたのだと思います。

室賀さんは私にとって、素晴らしい指導者であったと共に恩師の一人でもありました。いっぱい教わったことは、私の身体の中で生涯生き続け、忘れることはないでしょう。

室賀さん、どうか安らかにやすみください。心からご冥福をお祈り申しあげます。

室賀輝男さんを悼む

筑木 力

室賀さんとはじめて私が出会ったのは、昭和三十九年五月上旬、新潟国体山岳競技の会場に指定された飯豊連峰の・大石・杖差岳・北股岳・湯ノ平コースの予備踏査の時でした。室賀さんがリーダーで、藤井信さん、永島賢司さん、高橋小一郎さん、自衛隊員二人も一緒でした。かなりのハイペースで飛ばし、シゴかれた(?)のお話を覚えてます。

それからは越後支部や県山協のいろんな行事で一緒になり、指導を受けました。また新発田で行われたJAC自然保護全国集会での基調講演や、本部の創立百周年記念出版の「新日本山岳誌」の越後支部担当原稿の総括の仕事も依頼されました。拙宅にも何回か来られ、登山談義をしました。拙著に推薦の辞を寄せたり、出版記念会にも出席して祝辞をいただいたりしました。本当に律儀で精力的な人柄でした。室賀さんが日本の山岳界に貢献された功績は偉大です。

私より二つ年下でしたが、登山では先輩でした。体調を崩されたことは、かねてから聞いていましたが、まさかの訃報に驚いています。

室賀さん、どうか安らかに眠ってください。合掌

雪山賛歌に送られて

目崎 貞良

七月二十八日、山から帰って来ると待つていたのは室賀氏の突然の訃報でした。以前から奥さんに「来る時は土曜日の午後が良い」と言われていたので、二十六日電話をしたら「体調が悪いから日を改めて」と言われたばかりでした。二週間前も同じことでしたので心配はしていたのですが、まさかこんなに早く亡くなってしまおうとは夢にも思いませんでした。

健康を害してから最初は車椅子、近年は手足も不自由で寝返りもままならない様で、かつては岩場・雪山等色々な分野で大活躍されていたのと思うと残念でなりませんでした。私も週末はほとんど山に入っていましたので訪問は年四・五回位でしたが、山の話、先人達の話など聞かせて貰うのが楽しみでした。帰りの際には決まって「山は行ける時は無理をしても行ったら良いからね」と言う一言でした。自身歩けなくなってしまう無念さ・残念さがあるからこそ言葉と思うと聞くのも辛い一言でした。治る当てもない長い長い病魔との九年余の闘い、家族の方も本当に大変だったと思います。

小千谷ハイキングクラブは発足後十三年目ですが、室賀氏と前支部長の山崎幸和氏からの「小千谷にも昔山岳会があったんだ

からは非復活を」と何回も要請を受けてから数年後の発足でした。現在六十数名の会員で、市民登山を含め多少市民の健康推進、事故防止に役立っているのかなと思っております。

御二人の御指導と御協力が無ければ会も無かった訳で、御二人には本当に感謝しております。そして何より嬉しかったのは義理と人情を重んじる浪花節人生を生きている室賀氏の生き様は私の一番好きな道でもありました。

私など足元にも及ばない素晴らしい足跡を残した大先輩はセレモニーホールの雪山賛歌のメロディーに送られて二度と帰って来れないところへと旅立ってしまった、私の中にポツカリと大きな穴があいてしまいました。これからも多くの岳人の心の支柱として生き続けて下さる事と思えます。

合掌

北村猛会員を偲んで

杉本 敏 (長岡市)

平成二十五年五月六日病氣療養中の北村猛会員 (No.7216) が逝去された。生前の語り物語を書いて供養とします。

JAC越後支部発起人会が昭和二十一年(一九四六)十二月五日三島郡深沢村深沢

の高頭翁邸で開催された。その時、青山五郎の撮られた写真に、笠原藤七、北村嘉助、藤島玄、内田実、星光一、中村文次郎、高頭仁兵衛が写っている。

発起人の一人、北村嘉助が昭和二十九年二月二十一日山で遭難死(四十三歳)する。新潟鉄工勤務。親友の藤島玄は鉄工所退職しパン屋をしていて「忙しいだろう」と内緒で五頭山菱ヶ岳登山へ。そこで山口行雄(二十六歳)と遭難死する。藤島玄はその知らせを聞いて「なーしたあ!!」と言って絶句したという。当時、藤島玄の一の子分であった。

子は北村猛たけら。「親父は新潟鉄工のトラック荷台に載せられて帰宅した。家に着いてもコンクリートのように硬直したままであった」とJAC越後支部晩餐会で語っていた。

平成二十三年十二月十一日北村猛氏と電話で会話する。

藤島玄は昭和二十四年に新潟鉄工を退社した。整理されたのである。レッドパーズではないが、会社が大不景気に入り、登山をする社員の頂点にいたからだろうか。

藤島玄も喰っていかなければならないので、新潟駅から万代橋を渡って下り坂が終ったつた辺り、榎谷小路付近の大通り右側に店を借りて三光パン屋をだして商売を始めた。昭和三十年までパン屋をした。

北村猛は昭和二十六年工業高校を卒業。新潟鉄工下請け会社に二年間勤めて都合により退社する。次の就職先を父親北村嘉助に相談すると、父親が預かっていた越後支部の緑色の旗を風呂敷に包み「藤島のところ置いてきてくれや」。その時「玄さんに仕事どこが良いとこないですか」と相談してこいと言われる。本人に行かせたのは親父の考えがあったのだろう。藤島に「もうちょっと待てや」と言われた。

後日、新潟交通系列の部品作り会社を紹介され挨拶に行く。工場長と面接の時、星光一(支部発起人の一人)の紹介であることを知る。入社する。

年配者の多い職場であった。若いのが一人居て、使いつ走りのように一生懸命働いていた。十六歳の井出秀雄(元県山協理事長・支部役員)であった。北村猛二十歳。井出はまだ登山を始めていなかった。

北村猛は父北村嘉助が遭難死(昭和二十九年)して、父親勤務の新潟鉄工から入社の誘いがあり転職する。後年駅で井出秀雄がスキーを持って歩いているのに遭遇した。彼が山に憑かれていく頃の話である。

杉本が北村猛と話し合う経緯いきまじりは忘れてしまった。特に一緒に山行した記憶は無いし、記録も残っていない。県山協の懇親会、又はJAC越後支部晩餐会では、よく盃を重ねた覚えがある。「せがれが嫁さんもらた

てい」と喜び「嫁が職場の関係で、オレの為にケーキ持ち帰って食べさせてもらおうのは良いが、太って困ったてい」と大きくもない腹をさする。

シワ顔は、メガネの奥に大きな黒眼を輝かせてちよつと近寄りが見たい印象を与えるが、アルコールが入ると顔面ピンク色から赤色に変わる。「いやー酔っちゃたてい」といいながら多弁になる。好々爺のなにもでもない。私にとつての酔いどれ組仲間がひとり減ったことは寂しい。

せがれさんの「五十六年の山人生。良い一生であったとおもいます」を、天国で先人と自慢にして語り合ってもらいたい。

「親子二代にわたり日本山岳会員として越後支部そして県登山界の発展にご尽力された功績に深謝申し上げます……」と弔電も。県山協参与でもあった。享年八十一歳。

合掌



事務局連絡

平成二十五、二十六年度の新役員人事決定

五月二十五日に行われた平成二十五年年度越後支部総会において、支部役員改選が行われ、役員互選により支部三役と各委員長が決定承認されました。その後六月三十日の三役委員長会議において、各副委員長と専門委員についての指名と了解を得ました。新役員人事は次の通りです。

- 支部長 橋本 正巳(新・上越市)
- 副支部長 本間 宏之(再・長岡市)
- 副支部長 遠藤家之進正和(新・新潟市)
- 事務局長 桐生 恒治(再・見附市)
- 委員(事業) 小山 一夫(新・新潟市)
- (事業) 佐藤レイ子(新・新潟市)
- (事業) 成海 修(新・新潟市)
- (事業) 佐竹 信幸(再・会津若松市)
- (事業) 森沢 堅次(再・会津若松市)
- (広報) 本間 一人(新・新潟市)
- (広報) 遠山 實(新・村上市)
- (自然保護) 七澤恭四郎(新・上越市)
- (自然保護) 吉田 理一(新・魚沼市)
- (図書) 五十嵐 力(新・胎内市)
- (図書) 高辻 謙輔(新・新潟市)
- (県山協) 目崎 貞良(再・小千谷市)

- 委員(県山協) 後藤 正弘(新・上越市)
- (総務) 齋藤 宣雄(新・新発田市)
- 監事 森 庄一(再・長岡市)
- 幹事 遠藤 俊一(新・新潟市)

この度の改選で退任された方々は、山崎幸和支部長、井出秀雄事業委員長、加藤明文広報委員長、櫻井昭吉自然保護委員長、永島賢司県山協副委員長、山田智子総務副委員長の七名です。長い間支部業務にご尽力して頂きましたことに、深く感謝申し上げます。

「専門委員会メンバー」

支部の各種行事を遂行するために、各専門委員の委員長、副委員長及び専門委員メンバーは、次の方々が担当されますのでご紹介いたします。

- 一 事業委員会
 - 小山一夫委員長、佐藤レイ子副委員長、成海修副委員長、佐竹信幸委員、森沢堅次委員、鶴本修一委員
- 公募登山、親睦登山、高頭祭、海のウエ
- ストーン祭後援、他支部交流会などの登山行事や活動の企画実施など
- 二 広報委員会
 - 本間一人委員長、遠山實副委員長、高辻

- 謙輔委員
- 会報「越後支部報」発行の企画編集、各種行事の広報連絡など

三 図書委員会

- 五十嵐力委員長、高辻謙輔副委員長、佐藤レイ子委員

「藤島玄山岳文庫」や他山岳図書の整理管理とその有効活用促進、支部機関紙「越後山岳」や支部報への情報提供など

四 自然保護委員会

- 七澤恭四郎委員長、吉田理一副委員長、多田政雄委員、遠山實委員

自然保護パトロールや清掃登山、自然保護集会や自然観察会などへの参加や企画実施、環境破壊などの調査など

五 県山協委員会

- 目崎貞良委員長、後藤正弘副委員長、根津洋子委員、桐生恒治委員

県内山岳団体を統括している新潟県山岳協会と一体関係にあり、友好関係の堅持継続を構築し各種事業や活動の相互協力など

六 総務委員会

- 桐生恒治委員長、齋藤宣雄副委員長、山田智子委員、坂井美江委員
- 支部会員に係る全般統括管理、支部会費

徴収及び会計管理業務、委員長会議・役員会・支部総会の招集開催報告、支部年次晩餐会の企画運営、本部提出資料の作成報告、本部及び各支部との情報交換など

平成二十五年度支部会費納入のお願い

今年度支部会費(¥1,000)納入のお願いをしておりますが、八月十日現在で三十名の方がいまだ未納となっております。支部活動の運営を円滑に進めるため、至急支部会費納入にご協力をお願いします。郵便振込用紙を送付してありますが、紛失された方は別記の郵便振替口座に入金していただくようお願いいたします。尚、振込み手数料(¥120)は、各自ご負担願います。

郵便振込口座…
〇〇五二〇一六一九七七七九
公益社団法人日本山岳会越後支部

越後支部会員の勧誘と加入に協力願います

今年度越後支部では、「新入会員の加入・勧誘運動の強化に取り組み、十人以上の新入会員獲得を目指す。」と本部に公言をし

ております。現在四名の新入会員と二名の入会申込申請中ですが、更なる会員増加のために、支部会員の皆様のお力を借りて目標を実現したいと思います。
入会パンフレットと入会申込書は、事務局にありますので是非お声かけ下さい。

支部会員移動連絡

(二〇一三年四月十六日)
(二〇一三年八月十日)

1) 物故会員

- 北村 猛 (No.7216) 二〇一三年五月
- 室賀 輝男 (No.3925) 二〇一三年七月

2) 退会会員

- 横田利八郎 (No.4487) 二〇一三年四月
- 加藤 清 (No.9392) 二〇一三年七月

3) 新入会員

- ① 佐藤 芳英 (No.15246) 千九百九一五二三

南蒲原郡田上町大字川船河甲二二五〇一四一
TEL: 〇二五六一五二一九四九三

② 湯本 浩司 (No.15247)

千九四三〇六〇二
上越市牧区平方四六九一二

③ 坂井 英樹 (No.15329)

千九五四〇〇五一
見附市本所一―一七―五四

④ 立入 清 (No.15337)

千九四三〇四二二
上越市飯田五五七―二

4) 入会申込申請中

- ① 大島 隆 千九四二一〇七四四

上越市頸城区松本一―五五
TEL: 〇二五―五四四―八三六四

② 石山 政雄

千九百九一―二六五九
胎内市あかね町一五―五

5) 支部会員総数

二〇一三年八月十日現在
支部会員総数二百十五名、会友〇名

6) 住所変更

後藤 正弘 (No.14105)
千九四三〇八〇四
上越市新光町二―一―四〇

TEL: 〇二五―五一―二一七五六一

編集後記

広報委員長 本間 一人

七月二十五日恒例の高頭祭が元支部長、平田大六氏の祝詞で執り行われ、日本山岳協会の神崎会長の講話を頂いた。藤井信氏のたつての願いで二十六日、二氏は再会を果たすのだが、七月には室賀氏との永遠の別れとなった。この号は二ページに渡り追悼文となり原稿をお願いした方もいたが自主的に寄せられた方も、そして短文では語りつくせない故室賀輝男氏との思い出、その功績があまりにも大きく、毎回四ページの支部報も二ページ増やし六ページとしましたが、お寄せいただいた原稿はまだまだ書き足りなかったものごとく推察いたします。